

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
ブログ <https://hokke-commons.jp> /メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

偶然の出会いだった法華コモンズ

法華コモンズ仏教学林 事務局

武川 清明

私は北海道の出身で、実家は日蓮宗の檀家なのですが、長い間、信仰や宗教とはこれといった関わりがありませんでした。仏教に本格的に関心を持ったのは、東京に就職して10年以上が経過した頃のことです。

当時は初期仏教や空思想に関心があり独学で学んでいたのですが、その中で改めて自分が日蓮宗の檀家であることを思い出し、いくつかの寺院を訪ねるようになりました。

そうした折、ある寺院で熱烈な「折伏」を8〜9時間にわたって受けることになりました。当時は一応の檀家だったとはいえ日蓮仏教についてはまるで知らず、自分が学習した仏教の知識で応答したためか、お互いの意図が噛み合わず、会話は平行線のまま終わってしまいました。

この経験から、「法華経を読めば相手の言ったことが理解できるのではないか」と思い、私なりに読み込んでみたものの、日蓮仏教とのつながりが正直に言ってピンと来ませんでした。そこで「天台教学も勉強すべきではないか」と考え始めていたとき、偶然に見つけたのが「法華コモンズ」の講義でした。

受講したのは、教学委員の花野充道先生による「日蓮教学と中古天台教学の検討」という講義です。中古天台教学が何であるかも知らないまま「天台教学の講義みたいだから行ってみよう」と軽い気持ちで参加しましたが、日興門流の方々をはじめ大勢が集まっており、当時の私はすっかり気圧されてしまいました。

自己紹介で聴講者の方々がそれぞれの所属教団を名乗るなか、私は目を泳がせながら「会社員です……」と名乗ったことを記憶しています。（その際、気を使って声をかけてくださった大賀義明先生には大変感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます）

花野先生の講義は大変面白く、その後いくつかの講義や懇親会に参加するうちに他のスタッフの方々とも親しくなり、「人手が足りない部分があれば手伝いまししょうか」と提案したところ、いつの間にか自分の名前がスタッフとして「コモンズ通信」に載るようになり、そのまま現在まで活動が続けております。

スタッフとして関わるようになってから、仏教か否かを問わず、様々な信仰を持つ方とお会いする機会が増えました。そしてその信仰にも、きっかけや信仰の基盤となる価値観、経典・聖典などの信仰対象と自身との関係、組織と個人のつながり・距離感などが想像以上に多様であり、生半可に知ったようなことは言えないと感じるようになりました。（2頁上段へ続く）



個人的な話が長くなりましたが、実際のところ、私は日蓮教学・法華仏教に関してはスタッフの中で最も不勉強です。ですがそんな自分でも「法華コモンズ」の講義は非常に面白く、学びが多いと自信を持って言えます。むしろ講義概要を見たときに「自分には難しい」と感じたものや、一見興味の外だと思っただものにこそ、思いがけない発見や学びがありました。

この文章を読んでいる皆様にも、様々な講義を通じてその面白さを共有できれば幸いです。ぜひ、あえて関心の薄い分野やテーマの講義にも、時折足を運んでみてください。

講義報告

連続講座

前後期

「法華仏教講座」

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク 研究会での講義形式を踏襲し、およそ月一回のペース、毎回二時間の枠で開催されている。講師には、斯界で注目されている学者・研究者を毎回交代制で迎えられている。ここでは、令和七年度後期第三回〜第五回、並びに令和八年度前期第一回〜第四回の講義について報告を行いたい。各回ともに、常圓寺様祖師堂地階ホールを会場とし、Zoom 実況配信を同時に行うハイブリッド型の対面式で講義が執り行われた。また、いずれの回も、土曜日午後三時三〇分の開催で、仏教

思想研究・日蓮教学研究の第一線で活躍する研究者をはじめ多くの聴講者が集い、時に、時間を三〇分前後延長しての活発な質疑応答が行われた。なお、講義は全回、受講者にビデオ配信されている。

【後期第三回 株橋隆真先生】



令和八年（以下同）一月三十一日、興隆学林専門学校教授の株橋隆真先生を講師にお迎えし、令和七年度後期法華仏教講座・第三回講義「法体折伏について」が執り行われた。

株橋先生は、唱題の真義を鮮明化するものとして、慶林坊日隆師（一三八五〜一四六四）が用いた「法体折伏」の意味を尋ねられた。その「法体」は、日隆師によれば、本門事具一念三千を所摂とする題目（能摂）を意味する。「法体」には、摂め受け入れ導く「摂受」と、相手のあやまりを破折・調伏する「折伏」とがあるという。

株橋先生は、その意味を確認するために、天台教学や宗祖の撰折二門についても概観され、化儀・化法双方の視点を提示された。

論中、『観心本尊抄』第29 番答の撰折について「賢王は身を以て愚王を折伏し、宣教の僧は身は摂受であるが、口では正法を弘説するという折伏を行わなければならないという

ことであろう。（中略）理論も実践も法華経に求め、あくまでも出家が主体となるのが法華経の撰折であり、宗祖の撰折というべきであろう」と述べられたのは、印象的であった。

次いで、株橋先生は、日隆師の御聖教における「法体折伏」の用例を検討され、「法体」には本来「折伏」の徳が具わり、「法」そのものに「折伏」の義を見出せ、総名の南無妙法蓮華経が法体折伏であり、下種という行為がその行相に当たること。本門八品の説相は法尔法体の折伏であり、就中、不輕菩薩の弘経も法体折伏であること。以上から、題目の聞・信・口唱・弘通の信行の意義が明確化され、妙法経力の力用を具体的に説明したとき、「法体折伏」として表現されること―等を明かされた。

次いで、株橋先生は、関連論攷として、ご自身の「久遠成道（実成）に関する一考察」を取り上げられ、天台・宗祖における久遠成道（実成）、久遠下種、本因妙の修行―等を多角的に論じられた。

日隆師によれば、久遠の最初成道は、南無妙法蓮華経の本因妙の修行、名字信行の易行による。そして、その論拠は、特に不輕菩薩の二十四字の信行礼拝を現在の題目の意義を重ね合わせる宗祖遺文に求められるという。ここから、久遠成道・久遠下種・末法下種を南無妙法蓮華経で統一する見方が導き出され、滅後末法の衆生を正機とする視点から、日隆師

の所見が成立すると解説された。
日蓮教学研究界全体に大きな刺激を与える、
素晴らしい御講義であった。（布施義高 記）

【後期第四回 田中壮谷先生】



二月二十八日、国柱会
賽主の田中壮谷先生を講
師にお迎えし、令和七年
度後期法華仏教講座・第
四回講義「真世界文化研
究会発足の目的と経緯について」が執り行わ
れた。

本仏教学林理事長の西山茂先生は、曾て「日
蓮仏教の再歴史化」を成した代表的先達とし
て田中智学居士の名を掲げられた（本学林パ
ンフレット巻頭言参照）。日蓮主義を打ち出し、
国柱会を立ち上げた田中智学居士の「玄孫」
に当たり、同会第五代賽主を継承されている
のが、田中壮谷先生である。

近時（令和六年二月十一日）、田中智学居士
の事業を引き継いだ三団体（国柱会・立正教
団・立憲養正会）による共同研究機関「真世界
文化研究会」が発足し、同会より『師子王』が
発刊された。今般、田中先生は、同会代表世話
人の立場から、研究会の活動目的に関して、
以下の七項目を挙げられ、一々について、そ
の意味を詳しく論じられた。

1. 対立なく調和に満ちた真世界の現出をめ
ざす

2. 世界絶対平和の境地たる八紘一字の実現
をめざす
3. 正しき宗教観に基づく日蓮門下の統一を
めざす

4. 伝統的精神と今日的感觉を融合した「日
蓮主義」の樹立をめざす

5. 現代社会の課題解決に繋がる「日本国体
学」の確立をめざす

6. 人間存在の本質を踏まえた信仰心の喚び
起しをめざす

7. 家庭における教化を通じた続種護法の達
成をめざす

この中、2の「八紘一字」については、誤解
を受けてきたが、その真意は、文化的多様性
を認めながら互いを敬い調和を目指すことに
ある、と解説されたことが印象的であった。

総じて、その目線は、天皇を精神的統合の
中心と戴きながら、日蓮大聖人の法華経弘通・
衆生救済を現代において「真世界運動」とし
て展開することを企図することにある、と明
かされた。

講義終盤には、特別に映像記録『異體同心
の誓』を映写して下さった。田中智学居士が
身延山祖廟前で異体同心をもって一天四海皆
帰妙法の洪願成就を力強く誓われた様子、晩
年に力を注がれた国性芸術運動の概要、御遷
化後の葬送の様子などが紹介され、巨匠の晩
年の様子を、恰も、その場にいるかのような
臨場感をもって視聴させて頂いた。

日蓮門下全体に大きな刺激を与える、素晴
らしい御講義であった。（布施義高 記）

【後期第五回 菅原関道先生】



三月十四日、興風談所・
所員の菅原関道先生を講
師にお迎えし、令和七年
度後期法華仏教講座・第
五回講義「日蓮撰『注法華
経』と安然撰『悉曇藏』」が執り行われた。

菅原先生は、日蓮聖人の主著『観心本尊抄』
受持譲与段が導き出される前提となる三経四
疏の文に注目され、日蓮聖人の題目論の特徴
を穿鑿された。三経四疏の文は、多少の出入
りはあるも、『注法華経』『開目抄』にも見られ
る。

菅原先生は、平成二十三年に池田令道氏が
『注法華経』の三経四疏中の二経三疏の文が
安然撰『悉曇藏』に引用されていること、翌二
十四年に大黒喜道氏もそれを取り上げている
こと等を紹介しながら、また、庵谷行亨氏の
論文「日蓮聖人の妙字釈」を見据えながら、令
和六年に玉稿『観心本尊抄』受持譲与段の文
証の考察―『注法華経』『悉曇藏』との関連を
含めて―（『荊谷定彦 小西日遼 大平宏龍
三先生頌寿記念論文集 法華仏教の潮流―教
えと学びの道しるべ―』〈法蔵館〉）を執筆さ
れた。

今回の御講義で菅原先生は、玉稿に沿いながら、このテーマの概要を分かりやすく講述下さった。また、原稿執筆時に割愛された情報にも言及され、特に『注法華経』『開目抄』『観心本尊抄』に共通して引かれている「吉蔵疏云沙者翻為具足」の典拠について、研究史上、初めて明らかにされた。

今回の御報告を通して、日蓮聖人における『悉曇藏』の受け止め方の重要性が、あらためて注目されることとなった。

日蓮教学の核心を、極めて高い次元で検討された、素晴らしい御講義であった。

(布施義高 記)

【前期第一回 上杉清文先生】



四月二十五日、令和八年度前期法華仏教講座・第一回講義が、本学林・教学委員の上杉清文先生を講師にお迎えし、「性と仏教」の講義で行われた。大変興味深いテーマである。

講義では最初に、仏教における「女犯と男色」について、明治期に入ってから「僧侶肉食妻帯、蓄髪等、勝手たるべき事」や、中世の稚児灌頂等に関して細説された。

次いで、「本覚思想」について、台密や東密との対比を通して、それが凡夫を悟りそのも

のと絶対肯定する日本天台独特の思想（絶対一元論）であり、口伝が重んじられたこと。そして、そうした流れから、性的儀礼を重んじたうねりが生じ、「玄旨婦命壇」も展開することとなり、独特な「摩多羅神」への信仰が重んじられたことを細論された。

更に、性的な叙述が取り沙汰される『理趣経』について言及した後、「真言立川流」について、本有の思想や、誓願房心定の『受法用心集』の内容を詳説され、仏教と性の問題について私見を述べられた。

次いで、立川流について、従来の、性的儀礼を仏教の奥義と宣揚して異端視されたとする説に対し異を唱えた、近年の彌永信美氏と末本文美士氏の学説を紹介された。その後、「増穂残口」についても触れられ、最後に、本テーマに関する今後の見通しを示されて、凡そ二時間二十分に及ぶ講義を締め括られた。

驚嘆に値する膨大な読書量と、問題点の的確な把握に基づく御講義は圧巻であった。

講義終了後、聴講者から大きな拍手が送られた。

(布施義高 記)

【前期第二回 花野充道先生】



五月十六日、令和八年度前期法華仏教講座第二回として、法華仏教研究会主宰・本学林教学委員

の花野充道先生を講師にお迎えし、「法華教学における顕本論と化導論（1）」―法華仏教の思想史的探求―の講題で高説を賜った。花野先生は今後、法華仏教講座の中で、同テーマを連続講義の形で講じて下さることとなった。今回は、その第一回目である。

講義では、最初に「法華経解釈の科段」として、天台大師智顗に至るまでの中国諸師の解釈を挙げながら、その展開と智顗との関連性や同異二面を細かく講じられた。

次いで、「法華経に説かれる二つの特長」として「化導論」と「顕本論」に着眼され、前者（化導論）の三乗方便―一乘真実―正直捨方便―五時八教の教判を解説される中で、鳩摩羅什訳と梵本の相違、三車家と四車家の相違、十如是と五何法の問題などについて詳説して下さった。

また、「顕本論」についても、鳩摩羅什訳と梵本を比較対照して、羅什訳の特色を指摘され、法華教学史上の顕本論を考究する意義の甚大さを明快にご教示いただいた。

更に、「三種教相」についても、『玄義』一卷教相と『玄義』十卷教相の相違を細かに解説して頂き、日蓮が『玄義』一卷教相を「三種教相」として受容されていることを明確に示された。

花野先生の該博で奥深い学識に触れることのできた貴重な2時間余であり、講義終了後、聴講者から一際大きな拍手が送られた。

(布施義高 記)

【前期第三回 小西日遼先生】



六月十三日、小西日遼先生による令和八年度前期法華仏教講座第三回「八品門流門祖日隆の教団成立について」の講義が行われた。

小西先生は、本講座について、「法華宗（本門流）は、千葉県茂原市の鷲山寺・静岡県沼津市の光長寺・京都府京都市の本能寺・兵庫県尼崎市の本興寺の四大本山で宗門を構成している。かかる四大本山が異なる建立事情にも関わらず同一宗門を形成しているのは、日隆師の教学に傾倒した先師達の「本門八品上行所伝本因下種の南無妙法蓮華經を唱える信仰」が伝承されたためである。」と述べられて、四大本山をつなぐ紐帯である門流の祖、日隆師の事績を明らかにすることが、本講座の目的であるとして、豊富な資料を紹介しながら詳細に説明してくださった。

はじめに、日隆師の出自について、出身地や出家得度した僧侶と寺院などについて述べられた。その際、依拠した資料が寛文年間のもので近世の資料であり、今後さらに考究する余地があることを示された。

続けて、日隆の伯父にあたる日存師、日道師との出会いから、存・道・隆の三師が京都の妙本寺を退出したあと、法華宗（陣門流）の門祖円光坊日陣師のもとを訪ねていたこと、三

師と妙蓮寺との関係、京都本能寺・尼崎本興寺の建立、について多くの資料を提示してご説明くださった。

次に日隆師が布教した地域について、瀬戸内海の港のなかでも要港を選んで、その要港に拠点となる寺院を設けて布教を行っていたことを明らかにされた。また日隆師を支えた富裕層である「有徳人」について、日隆師の伝記書をもとに紹介し、これに関連して、兵庫津の北関を通行した船舶の詳細を記録した資料である『兵庫北関入船納帳』を紹介し、そこに記されている船主や船頭の名前が、日隆師の伝記書や日隆師が授けた漫茶羅本尊の授与者のなかに見られることを指摘し、日隆師を支えた有徳人の状況について詳細に述べられた。かかる船舶の通行に関する資料について、当コモンズ教学委員の寺尾英智先生は、講義終了後の総評のなかで、「寺院や僧侶の歴史を研究する場合、寺院関係の資料をもとにする場合が多いが、小西先生は、船舶の資料にまで目を通され、多角的に分析をほどこされている」と小西氏の炯眼について、高く評価されていた。

最後に、日隆師が定めた僧侶や信者に対する信心に関する法度、並びに本能寺・本興寺両寺に関する法度についてご説明をいただき、予定時間を超えた約二時間の重厚な講義を終了した。小西先生は、膨大な資料を緻密に検討し、そこから得た確かな知見を、我々に語

りかけるように示してくださった。

講座終了後には質疑応答の時間が設けられ、法華宗（本門流）の研究者を中心に、各方面の方々から熱心な質問があり、一つ一つの質問に丁寧にお答えになられていた。

（西山明仁 記）

【前期第四回 丹治正弘先生】



七月四日、令和八年度前期【法華仏教講座】第四回として、放送大学大学院歴史研究会副会長、右筆資料調査会代表幹事の

丹治正弘先生をお招きして「日蓮の世界認識とその意義」の講義が行われた。

日蓮聖人の教学の基底をなす世界観や、法華經弘通を達成すべき世界への視線を学ぶ、非常に重要な講義であった。

まず、丹治先生は、日蓮聖人が世界を認識するに

当たって、凡そ、

（１）規範としての宗教

（２）現世の内在化

（３）世界という視座

の三つを主な思考回路としていたと指摘された。その上で、今回は、（２）（３）を中心に、日蓮聖人の世界認識の特徴を四方八方から細説して下さった。

すべての日蓮研究者や学徒が、必ず学ぶべき内容に満ちた素晴らしい御講義であった。

今回の御講義の詳しい内容は、近く『法華仏教研究』等で論文として公刊される予定である。ここでは、以上を記すに留めたい。

丹治先生の広博な知識と鋭い考察力、理路整然とした語り口が光る、大変貴重な2時間であった。

(布施義高 記)

講義報告

一日集中講座

『菩提と覚—仏教における覚醒の概念の歴史—』

講師 大竹 晋 先生

報告 佐古 弘純



令和八年四月十一日

(土)、大竹晋先生の一日

集中講座『菩提と覚—仏教における覚醒の概念の歴史』が開催された。先生

は現在、宗教評論家、仏典翻訳家として活動され、『仏のなりかた』（春秋社）、『現代語訳最澄全集』全四巻（国書刊行会）、『悟りと葬式』（筑摩選書）、『大乘仏教と小乗蔑視』（国書刊行会）等、多くの著作が出版されている。

本講座は、インド仏教における菩提の概念の歴史をたどり、さらに中国仏教、日本仏教における覚の概念の歴史を学ぶ内容となった。はじめに先生は、「覚」と漢訳される梵語の語源ブット (buddh) を確認し、この語根から

派生する「目覚め」を意味するボーディ (bodhi) が「菩提」と漢訳されることから、「菩提がブツダによって説かれた法の体系（有為法・無為法）において、いかなる法であると考えられているのか」と先生は述べられ、講義が開始された。以下、省略して報告いたします。

①インド仏教

まず、上座部・説一切有部・唯識派といった部派、学派の伝統においては、仏・独覚・声聞が別々の菩提を得ること、その菩提はおおむね智であると説かれていることを確認した。

ところが、部派・学派の伝統と別個に現れた大乘経においては、菩提は「真如（そのところのまこと）」と説かれており、大乘仏教独特の真理として、あらゆる法（粹組み）に内在すると考えられている「空性（からっぽさ・無自性）」を指していることを説明された。また、これにもとづいて、唯識派のヴァスバンドウ（世親）は後に、菩提は真如であると説かれるようになるが、菩提は智であるという説と、菩提は真如であるという説とが別々に採用されている（あくまで如来の真如のみが法身であり、あらゆる有情の真如は法身ではない。法身は如来のうちのみにあり、法身の別名である菩提も如来のうちのみにある）、と解説された。

②中国仏教

玄奘によってインドから移植された唯識派である法相宗においても、菩提は智であると

いう説と、菩提は真如であるという説が別々に採用されていること（インド的アイディア）、また、法相宗の開祖（慈恩大師基）が、真如は菩提における性（本性）であり、智は菩提における用（作用）としている（体用、中国仏教的アイディア）ことを指摘された。

次に、唯識派において、智は有為法のうちに含まれ、真如は無為法のうちに含まれているから、智≡真如というわけではないが、『大乘起信論』（以下『起信論』）では、「菩提は智である真如である（菩提が真如と説かれ、それがさらに色にとつて空しからざる本性である智）」と説かれ、真如にもとから大智慧光明があり、真如を如来蔵、法身とし、本覚とも呼ばれていることを説明された。また、唯識派においては、如来の真如（如来の内のみ）が法身と呼ばれ、そのような法身を菩提としているのに対し、『起信論』においては、あらゆる有情の真如が法身（≡本覚、≡智）と呼ばれ、法身があらゆる有情の中にある、とその相違を明かし、『起信論』の特徴を解説された。

③日本仏教

日本においては、『起信論』の「菩提は智である真如である」という考え方を空海が採用し、智である真如である法身が理智法身（法身説法たる密教の教主・自性受用仏）と呼ばれ、その後、理智不二法身とされるようになったことを指摘された。

最後に大竹先生は、本覚思想への疑問とし

講義報告 一日集中講座

「新・学問のすすめ 研究者失格！」

―『見るなの禁』を見た男―

講師 磯前 順一 先生

報告 澁澤 光紀



去る五月九日(土)午後一時半より、磯前順一先生の一日集中講座「新・学問のすすめ 研究者失格!『見るなの禁』を見た男」が、実況&オンラインで四時間半にわた

て、「真如は空性の別名であるから、もし真如が智であるならば、空性が智であることになる」、「真如は有情と無情(非情)とを問わず世界に遍満しているものであるから、もし真如が智であるならば、あらゆる有情に智である真如があるのみならず、あらゆる無情にも智である真如があることになる。『起信論』においては、そこまで説かれていないが、日本仏教においては、現に無情成仏(非情成仏)が説かれるようになった。しかし、それは空理空論というものである」と主張された。そして、菩提に対する仏教の考え方が、インド・中国・日本で異なっており、その異なりに対する細やかな配慮が望まれることを述べ、講義終了となった。

本講座は、対面とリモートの両方で行われ、多くの方が参加された。聴講者の質疑に対して、丁寧に応答して下さった先生には心より感謝申し上げます。

磯前先生の講義は、令和四年度後期にオンライン講義で実験的に開講された「震災転移論―末法の世に菩薩が来りて衆生を救う」以来で、今回もオープニングにレッド・ツェッペリンの「天国への階段」を流して始まる、実にパフォーマティヴな講義となりました。

まず講義の始めに司会者が、磯前先生が用意していた講義の要約を読み上げます。

「本講義では、日本の昔話や怪談にあらわれる「見るなの禁」を手掛かりにして、人間が社会の中で、何を見ない事によって生きているのか、そして見てしまった者は、その後どのように生きれば良いのかを問いながら、考えていきます。」

この前言に続いて、レジュメの全四章の要約が述べられてから、磯前先生の講義がスタ

ートしました。では、その章立てに沿って講義の概要を報告していきます。

第一章「夕鶴―見るが裏切りになる謎」では、木下順二の鶴と人間の婚姻譚「夕鶴」を題材に、禁を破って見たことで破綻する「自然(鶴)と人間」の関係が問われます。そして、動物や穢れや死を見ないことで保たれる人間の社会秩序(共同体)が、「差別」によって成り立っていること、またタブーを破って見た者は本人自身も共同体からタブー視されて、差別されることが論じられます。

第二章「牡丹灯籠―フロイトとユング、世界への転移と世界からの逆転移」では、「転移」がテーマとなります。「転移」とは、自分の主体性を手放し、世界や他者に預けてしまう(支配されてしまう)ことであり、責任を「他のせいにする(転嫁)」や「依存する」ことでもあります。

講義では、自分が転移(支配/依存と信頼の両義性)に気づいて、そこからどう解放されるかが問われていきます。自分を追放した世界への恨みは「世界への転移」であり、それに憑依されることは「呪い」にかかることなのです。

第三章「青髭―幻想からの目覚め」は3つ項があり、1項の「青髭―世界の裂け目」では、青髭から部屋の鍵束を受取った新妻が「開けてはいけない」部屋の鍵を使って先妻たちの死体を見てしまった物語から、転移という

畏や呪いに陥らないためには「他人の鍵はもらわない。自分の鍵は他人に渡さない」ことが、他人に憑依されず自分の魂も明け渡さないための倫理だ、という教訓を引き出します。

2項の「福島幽霊―死者の沈黙に声を聴く」では、見る事だけではなく「沈黙の声を聴く」ことによって初めて語ることが成り立つ、という傾聴の論理を説明していきます。

第3項の「この地上に尺度はあるのか」では、技術的な研究に対して「学問は魂にかかわる学び」だとして、講師自らのあり方を問い直していきます。

第四章「コトドワタシーイザナキ・イザナミ」では、コトドワタシ（言戸渡し？）という「死者の声を聴いてもそれを盾にせず、役割は引受けるが同一化は拒み、言葉を渡して去る」という行為を、「見るなの禁」の最短の反転だとして、1項では日本の戦後における「傀儡天皇論」と「GHQの占領論」という見るなの禁を通して、その幻滅に耐えて至る覚醒について語ります。

そして2項の「悲哀をかみしめる」では、死者に生かされる自分や見えないものを語る学問の必要性が述べられ、3項の「世界」の「呪い（＝転移）」を解く」では、「世界という幻想」から自由なることの意味が問われていきます。最後は、磯前先生の恩師の藤間生大が遺言とした「見るべきものを見つ（壇ノ浦合戦での平知盛の言葉）」を引いて、「見た事を記憶

したまま、口にせず生き延びる」、そして「幻想こそが浮世に生きる原動力」として生きざるを得ない、そうしたダブルバインドの存在としての「人間」を再定義するコトドワタシをして、講義を終えられました。

その後の質疑応答も予定時間を越えて行われ、充実した講座となりました。報告の最後に私的な感想を述べておきます。

講座の題名にある「研究者失格！」とは反語的な意味合いで述べられています。磯前先生は講義全体を通じて、技術だけで魂のない研究者に対して、学問とは魂に関わる学びであり、「学問とは、死者の声を聴き、語れないものを語る営みである」と批判しています。そのことを宣言するために、あえて「研究者」を降りたのだと思います。

また、講義後に気づきましたが、磯前先生のこうした学問のあり方は、日蓮信仰者で歴史学者の上原専祿が五三年前に提起した「死者との共存・共生・共闘」、「死者のメディアになる」という言葉とぴたりと重なっているのではないのでしょうか。

ですから、この上原専祿の「死者・生者」論も含み込んだの磯前先生が、今後どのような「魂にふれる学問」を展開されていくのか、目が離せません。見るなど言われても見ざるを得ない、眼も眩むような展開を期待して、待ちわびるばかりです。

講義報告

連続講座 後期全六回

『法華経』『法華文句』講義

講師 菅野 博史 先生

報告 澁澤 光紀



菅野博史先生の連続講座『法華経』『法華文句』講義は、本年三月に「薬草喻品第五」を終えて五月には「授記品第六」から「化城喻品第七」に入り、七月の講義で通算九八回となりました。テキストの『法華文句（Ⅲ）』では、八六四頁の四行目までが終了したことになります。では年度をまたいで七回にわたった講義の概要を、簡単に報告していきます。

「薬草喻品」では、前回の講義で取り上げた「如来は一相一味の無差別の実（真実）だが、草木等に喩えられる「衆生」は差別があるため権（方便）であるとの対比から、無差別＝差別論が論じられていきます。そして、「空」という概念が出されて、一相一味が大乗仏教の究極的な涅槃の境地に至る事が示されます。つまり、畢竟は「空」であるが故に、如来の説法は無差別ということなのです。

「究竟涅槃」の解釈でも二乗の有余・無余がある涅槃ではない究竟となる涅槃であり、「常寂滅相」も常住の寂滅なので、「終に空に帰す」の「空」も、二乗の灰身滅智（灰断）の空では

ありえず、「中道第一義の空」である、と説明されます。

また、大雲の大雨の如き如来の一味の説法により、大中小の草木のごとき衆生が、等しく成長して悟りに至るとする説明では、偈文に「その雨は等しく四方に流れること無量にして、率土を充ち洽(うるお)し、山川險谷の幽邃に生いたる所の卉木葉草や大小の諸樹など、雨が豊かに潤す」とある「山川險谷・幽邃所生」を次のように解釈しています。

「幽邃所生」とは、上の第二の衆生の習因の差別を頌する。衆生が久遠の昔に植えた習因は、五陰・十八界・十二入のうちに隠れることをたとえるので、「幽邃」という。今、法の雨を受け、すべて開くことができるので、「所生」という。」

私見ですが、ここでいう「衆生が久遠の昔に植えた習因」とは、「仏種」ではないでしょうか。娑婆の生活で隠れているその仏種が、いま法の雨を受けてすべて開くというのはいわば「脱益」で、この「幽邃所生」の一句は、下種益・熟益・脱益の「三益」の教学的発想の源ではないかと思わせるほど、『文句』の随文釈義の深さを感じさせます。

そして「葉草喩品」は、最後に偈文で次のように述べます。

「仏の説法は一味の雨のように同じものだが、それぞれ聴く者のレベルに見合った対機説法に聴こえて、それぞれに見合った悟りの道に

導く。仏はいつも譬喩という方便を使って仏道を開示する。今はあなた達のために最も大切な真実を説こう。あなた達が行じている仏道は、実は「菩薩の道」にほかならない。だからよく修学して皆すべて仏になりたまえ。」

このように『葉草喩品』は、皆が差別のない菩薩であるという、皆成仏道の平等性を明かして終わります。この随文釈義として『文句』は、「同一の雲・同一の雨と同一の音声とは、同じであるのか違うのか」と自ら問います。

その答えは「仏は同一の音声によって(衆生の多様な)種類にしたがってそれぞれ理解させる。今、同一の雲・同一の雨は、まさしく衆生の多様性にしたがっての同一の音声である」でした。

しかし一つの音声の説法が、それぞれの機根に合った対機説法になれるのだろうか、という疑問があります。また、仏の説法が同じ一つで平等だとしても、結果としてはそれぞれの機根に従っての悟りにしかならないのでは、という見方もできます。

「批判仏教」の松本史朗先生は、「葉草喩品」の譬喩が差別的だとして「仏の説法という同じ雨が降っても、三草二木という違い(機根・種姓)の差別はなんら変わらない」という見解を述べていますが、菅野先生は、『法華経』の説く皆成仏道の平等性を挙げて、「一仏乗を説く『法華経』の教えにしたがうべき」として、松本説には反論されています。

次の「授記品」は、四大声聞の摩訶迦葉、須菩提、大迦旃延、大目犍連が順次に授記を与えられていく内容ですが、『文句』は随文釈義ではなく、「授記」について教学的な詳しい説明をしています。

授記を三因仏性に約して、①正因の記別は「常不輕品のようなもの」、②縁因の記別は「法師品の十種供養のようなもの」、③了因の記別は上中下の三根の人に授けるようなもの、と解釈します。

また他の經典では、「二乗と悪と女には授記しない」とあるが、法華経は全てに授記するとも述べています。そして『首楞嚴経』の四種の授記、『菩薩瓔珞経』の八種の授記について、また四悉檀に約しての授記の解釈を講義して頂きました。

「授記品」で気になった点があります。テキストに「正因の記の若きは、常不輕の如し」と「未発心に記を与うるは、常不輕の如し」などと『不輕の菩薩授記』が出てきます。この不輕の菩薩授記は、本来は仏しかできない授記の特例になります。

『法華経』は仏性思想が登場する以前の經典ですから、授記(成仏の保証)思想が中心となります。そうであれば、そうした授記と三因仏性の関係が『文句』においてどう解釈されているのか、また不輕菩薩の授記と仏性思想との絡み合いをどう考えたらよいのかなど疑問が生じて、勉強課題が残りました。

「授記品」は五月講義で終わり、「化城喻品」に入りました。「化城喻品」ではまず品題を解釈して、「化」とは神通力の働きで、「城」は敵の防御を意味するとして、権仮(かり)に名づけるので「化城」と説明します。

また、此の品が宿世(過去世)の因縁を説いて下根の人を悟らせるのだから、「宿世品」というべきではないかとの問いに対しては、この品の前半は宿世の話だか、後半は化城の話なので「化城喻品」だと応じます。また上根は疑いが少ないが、中根は疑い深い、下根はもっと疑い深いため、先ずは宿世の機縁を明かして、後に実の悟りの宝処を示すので「化城喻品」だと述べます。こうした品題解釈の次に、科文の「入文解釈」に入りました。

『文句』テキストでは「最初にさらに二段がある。第一に遠い昔(久遠)を知見することを明らかにする。第二に宿世(過去世)の結縁を明らかにする」とあり、化城喻品が「久遠」と「結縁」をテーマに構成されていることを説明します。そして「正しく結縁を明かす」では、結縁に「遠い理由(遠由)」と「近い理由(近由)」があることにふれ、「遠い理由」には大通智勝如来の成道と梵天達の請法(説法を願う)があり、成道についての五段の様相を、1・仏寿が長遠、2・成道の前後、3・正面から成道を明かす、4・成道後の眷属供養を明かす、5・法輪を転じることを請うことを明かす、の順で説明していきます。

「(結縁の)近い理由」については、仏は請いによって説法するため「覆講」して正しく結縁をすると述べられます。「覆講」とは、仏の説法を受けた弟子たちがその内容を繰り返し講義・説法することで悟りを得ることをいいます。そのやり方としては、まず半字(小乗)の法輪が転じられ、次にそれを聴いた弟子たちが字を廃しての満字(大乘)の説法を請い願う、という次第となります。

七月の講義は、『文句(Ⅲ)』の八五八頁の「『三転』とは示・勸・証を謂う云々」から始まりました。経文は、大通智勝如来が梵天王達と十六王子の要請を受けて、十二行の法輪を三回転じて、十二因縁の法を説くところから始まって、沙弥となった十六王子に請われて『大乘経・妙法蓮華経・教菩薩法・仏所護念』の教えを八千劫休まずに説き終わる八万四千劫の禅定に入ったところまでです。

『文句(Ⅲ)』の随文釈義では、仏が「十二の法輪」を三回転じた「三転」とは、「示す、勧める、証す」のことで、また「示教利喜」にも当てて、示が示転、教が勧転、利喜が証転である、との解釈から始まります。また「三転」は、衆生に上中下の三つの機根があるためとも解釈されます。

「転」についても詳しく解釈して、この法を転じて、他人の心に渡り入り、覚りを得させ、外道の邪見を破らせるからこそ「転法輪」といわれるのだから、その意義を持つていない

魔や梵天などには決して転じる(法を説く)ことはできないとします。

十二因縁については、苦集滅道の四諦を詳しく観ずることとして、声聞・縁覚・菩薩は共通して十二因縁を観察するが、二乗には生滅のある有量の十二因縁で、菩薩にとっては無生で無量の十二因縁となります。

出家した王子達が請うのは「満字(大乘)の法輪」であり、この求めを『文句』では「満字廃半を請う」と述べています。その請いに応えて仏が説くのが『法華経』です。

この『法華経』を聞いて十六王子や二乗たちはすぐ理解できたのですが、経文に「其の余の千万は皆、疑惑を生じ」といわれた聴衆がいて、これは後に十六王子に縁を結び導かれる者達とされます。そして『法華経』を説いた仏は、その後に入定(禅定に入る)することを明かすのですが、講義は『文句』の八六四頁の「入定の時節は、即ち是れ「八万四千劫」なり」で終了しました。

次回の八月講義では、この続きで「是時十六菩薩知仏入室」の下は、第二に正しく結縁す。」からになります。これから教学的にも重要な「化城喻」についての講義に入ります。

菅野先生のレジュメは科文・経文(訓読)・『文句』現代語訳・注釈が揃った充実した内容で、途中からでも充分ついて行ける講義ですので、ぜひ皆さま、御聴講ください。

法華コモンズ仏教学林 後期講座一覧

2026(令和8)年度 後期講座 開講:10月~3月(2027年)

●すでに終了した講義も、動画配信等で受講できますのでお申込み下さい●

●集中講座 「政治と宗教を考える集中講義」 ※第1部と第2部の二つの講義

開催日時: 10月3日(土) 午後1時30分~5時30分(4時間)

講師: 櫻井義秀

第1部: 統一教会問題——解散命令と山上裁判 全1回 【対面&実況】 【受講料】 3,000円

第2部: 2050年の宗教未来地図——興隆する宗教と衰退する宗教(宗教二世問題の裏面)

●集中講座 「敗戦と占領 それで自由になったのか—GHQの天皇傀儡論と国家神道論—」

開催日時: 11月28日(土) 午後1時30分~5時30分(4時間)

講師: 磯前順一

全1回 【対面&実況】 【受講料】 3,000円

●連続講座 「仏教哲学再考③—日本仏教を哲学する I」

講師: 末本文美士

開講時間: 水曜日 午後6時30分~8時30分 全4回 【オンライン講座】 【受講料】 8,000円

開催日: 第1回(通算17講)

10月 7日

第3回(通算19講)

12月 2日

第2回(通算18講)

11月 4日

第4回(通算20講)

1月 6日(2027年)

●シリーズ講座 《法華仏教講座》 全6回 【対面&実況】

開講時間: 土曜日 午後3時30分~5時30分 ※12/26、第3回のみ午後2~4時開講

第1回 10月17日 「“点の宗教”と“面の宗教”—書評コキアム『一九六八年と宗教』補論」

講師: 小川寛大

第2回 11月14日 「日蓮と北条時頼をめぐって」

講師: 坂井法暉

第3回 12月26日 「青年日蓮論—五戒・五行への注目を軸に」

講師: 岡田文弘

第4回 1月23日 「法華教学における顕本論と化導論(2)」

講師: 花野充道

第5回 2月27日 「源信における往生と成仏 — 一乗円宗の視点を通して —」

講師: 伊奈 潔

第6回 3月 6日 「中世延暦寺における論義文献の形成過程」

講師: 長谷川裕峰

【受講料】 1期6回分 12,000円、1回 2,000円

●連続講座 「『法華経』『法華文句』講義」 全6回 【対面&実況】

講師: 菅野博史

開講時間: 月曜日 午後6時30分~8時30分 【受講料】 1期6回分 12,000円、1回 2,000円

開催日: 第1回 10月19日

／ 第2回 11月30日

／ 第3回 12月21日

第4回 1月25日

／ 第5回 2月22日

／ 第6回 3月29日

【会場】 新宿常圓寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿 7-12-5 電話 03-3371-1797(寺務所)

【申込】 受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX: 042-627-7227

mail: hokkecommons@gmail.com / ブログ: <https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内

法華コモンズ仏教学林 事務局

賛助会員一覧 (敬称略)

※令和八年度分として

個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	2口	菅野 博史
6口	松原 勝英	2口	国府田義昭
6口	中野 顕昭	1口	久保田正尚
6口	持田 貫信	1口	成田 喜達
3口	西山 茂	1口	匿名 希望

法人会員 ※1口 五万円

3口	理性寺	2口	本妙寺
2口	本國寺	2口	法妙寺
2口	善生寺	2口	善龍寺
2口	東洋哲学研究所	2口	持法寺
2口	天龍寺	1口	立行寺

◎皆さまのご賛助ご支援に篤く感謝申し上げます。
令和八年度も引き続きご支援のほど、お願い申し上げます。

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。左記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口(1万円)
- 法人・団体会員 1年間1口(5万円)

《お申込み年度の特典》 変更点有り

- 1、個人会員で6口以上の方は、年度内前後期の全ての講座をご受講・動画配信視聴出来ます。
- 2、法人・団体会員では2口以上で、1口ごとに所属団体員1名が年度内前後期の全ての講座をご受講・動画配信視聴出来ます。

● お申込み頂ける方は、次の内容を書いて、表紙タイトルまたは11頁下にあるメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

★ 個人か法人か、また何口かを明記する。

★ 名前、年齢、住所、電話、ファックスまたはメールアドレスを明記する。

● 直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙か、下記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 00150071634712

「講座映像版」販売のお知らせ

- 菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回
- 池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○ 菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

- ① 鎌倉時代を射程にいれて ② 《顕密問題》を考える
- ③ 日本宗教史の名著を読む ④ 鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

他講義についてはご対応できる場合がありますのでお尋ねください。

◎ダウンロード版：価格一万二千元（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジュメPDF

◎DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジュメ印刷物

◆ 詳細はブログ(<https://hoke-commons.jp>)参照。

【本化ネットワーク叢書】

叢書3『本門戒壇論の展開』頒価一冊二千元+送料

※『日蓮の諸宗批判』『九識説』とは何か
はコモンズのブログで無料公開中です。

法華コモンズ通信 第十七号

発行日 二〇二六(令和八)年八月十六日

編集発行 法華コモンズ仏教学林

発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一一九

【FAX】042(627)7227